

論点スペシャル

指導 服従の構造

この問題がこれほど社会的関心を集めたのは、日大の選手としての背景に、命令と服従の関係があり、どうも個人プレーで悪質な違反をしたのではなく、日大アメフト部という社会構造の、一種の病理がプレーに反映したのではないかとということが見え隠れし出したためだ。加害者の選手は実は弱者で、服従の構造の被害者では——。その点に多くの人が、自身も感じてきた日本社会の不合理さを重ね、共感が広がった。

生では、部をやめるのは大学を辞めることにも等しい。競技が人生の全てに近い選手にとって、それは自分のキャリアと存在を全否定するようなもの。監督、コーチの命令にノーと言ふことはあり得ない。服従の構造は、女子レスリングのパワハラや女子柔道、部活動での暴力問題にも共通している。

特定の期間内に成果を出すことを求められる指導者も、強いストレスを抱えている。スポーツをブランド向上手段として重視する大学で、経営にまで絡む指導者ならなおさらだろう。日々練習漬けの閉じた空間で、勝てば全てが容認されるような行動原理を優

早稲田大学教授

友添秀則氏



日本大アメリカンフットボール部の危険タックル問題は、スポーツ界の指導者と選手の「服従の構造」が、社会通念に外れた歪みの温床になり得ることを改めて示した。問題の根はどこにあり、私たちは何を变えていくべきなのか。

今回の騒動を見ていくと違和感を感じる。関係者が、あ

日本社会の不合理さ反映

ともぞえ・ひでのり 早大教授。スポーツ庁スポーツ審議会会長代行。日本スポーツ教育学会副会長。スポーツ倫理学、教育学の著書多数。61歳。

先ずれば、それは社会一般の倫理や規範からずれて行く。日本のスポーツ集団は、多くが言葉のない世界だ。選手は体で覚えると言われ、懸命に空気を読み、徹底した者がレギュラーになる。そのレベルの以心伝心の理解に乖離はまず有り得ない。指導側は、「由らしむべし、知らしむべからず」で一切情報を与えない。不安にさせ、依存の体質が生まれ、選手が自立しないように仕切る。日大アメフト部では、選手を「追い込む」と称して故意にスケープゴートを作る、負のアプローチの代表的な手法まで使われた。

こうした服従の構造の根を、実は日本の歴史に見ることが出来る。明治時代に学校体操に兵式体操が加わり、大正時代の陸軍将校の学校配属令により、教練が始まった。配属された多くは将校ではなく下士官で、言葉よりも暴力やいじめで、身体服従をして命令服従への強制を行った。これが戦後の運動部などにも、引き継がれて行ったと考えている。スポーツは社会を反映する。服従の構造は、日本社会の病理を、そのまま映しているとも言える。

スポーツは、社会にとって重要な領域であり、大きな可能性を持つ。自己実現や生きがいとして、人間教育として、生まれてから死ぬまで私たちに伴走してくれる。アメフトの事案も契機に、倫理が空洞化している現状を見つめ、日本から新たなスポーツの価値観を発信できればと願っている。

(編集委員 結城和香子)